

第 42 回 山形県消防職員意見発表会 最優秀賞

第 44 回 東北支部消防職員意見発表会 優秀賞

東根市消防本部 渡邊 航生

「火災を起こしてみませんか？」

皆さんが行ったことのある「火災の避難訓練」を思い出してみてください。こんな内容ではなかったでしょうか？

「それでは避難訓練を開始します。出火場所は調理室、発見者は〇〇さん、119番通報は〇〇さん、初期消火は〇〇さんです。10時になったら訓練スタートです。」

いざ訓練が始まると、火元を横目に避難する人達。

「消火して下さい！」

と声をかけると

「いや、私の担当じゃないです。」

ある学校ではベルが鳴っても一向に避難しない生徒達。

「なんで逃げないの？」

と尋ねると

「先生が放送で待機と言ったからです。」

この台本通りに事が進む「劇場型」避難訓練に私は違和感を覚えました。いつなんどき、どこでどのように起こるのかわからない「本当の火災」にこれでは絶対に対応できません。この人達に本気になってもらうために、私は決めました。避難訓練で「火災」を起こしてしまおう。きっとこの人達は「本当の火災」の恐ろしさを知らないから本気になれないんだ。

約3年前から、東根市では避難訓練を行う全ての施設で「火災」を起こしています。もちろん本当に建物を燃やすわけではありません。機械で無害の煙を出したうえでの「完全ブラインド型」避難訓練です。設置されている消防設備については事前に説明し、あるもの全てを使用して火災対応するよう伝えます。あとは通常通り勤務してもらっている中、火災が発生します。火災を知らせるベルがなるか、誰かが火災を発見したところから訓練スタートです。

いざ訓練が始まると、消防設備が全く使えない、電話のある部屋に煙が充満して通報できない、避難口が煙で塞がれて逃げられない、現場は騒然とします。そこではまさに、「火災」が起きています。

最初ほどの施設でも大失敗。

「こんなことやったことがない。いきなりできるわけがない。」

こう言われましたが、私はこう伝えてきました。

「火災は皆さんの準備を待ってくれません。これが現状です。今の皆さんではこの建物にいる人達を守れません。もし犠牲者を出してしまっても遺族にその言い訳ができますか？」

2度目の避難訓練から全ての施設が本気になります。

「ここで火が出たらどうする？あの屋内消火栓は届くのか？消防士さんすいません、窓から逃げるのはありますか？」

「もちろんです、『火災』なのでなんとしてでも避難して下さい。」

これが当たり前になった東根市内の施設は、全国トップレベルで火災に強いと自信を持って言えます。この訓練には副次的な効果もありました。インパクトの強いこの訓練を経験した人達は、自然とこの話を自宅に持ち帰ります。それが自ずと「住宅火災の予防」にも繋がっていたのです。やはり人は、一度自分の身に降りかかったことに対しては徹底的に考えるものだったのです。

さて、過去の火災でいったいどれだけの人達が命を落としてきたでしょうか。我々消防職員は、犠牲者の思い、残された遺族の思いを全て背負っています。過去の火災から学んだことがあります。それは、火災が起きてから消防隊が救える命は限りなく少ないということ、すなわち皆さんの火災予防に勝る人命救助はないということです。しかし、放火や漏電など予測不可能な火災原因が存在する以上、火災が無くなることはありません。だから我々だけでなく、皆さんも火災と対峙する準備をしておかなければいけないのです。

全国的には未だに台本ありきの避難訓練が主流です。本年6月には東根市の避難訓練を全国版の消防情報誌に投稿して呼びかけます。この避難訓練を全国的に「新たな常識」にしましょう。これまで通りでは救えない命が必ずあります。逆に言えば、これまで通りをほんの少し変えるだけで助かる命があるのです。

皆さんも私の話を多くの方々に広めて下さい。そして皆さんがいる施設で避難訓練の話が出た時には、必ずこう提案して下さい。

「この建物で火災を起こしてみませんか？」